

# 平成30年度 芦屋特別支援学校 学校評価結果

## 学校経営の重点

- ① 安全安心に学べる学校づくり ② 子どもたちに力をつける指導、個々に細かく見つめる事例研究の充実 ③ キャリア教育・就労支援の充実 ④ 交流及び共同学習の推進  
 ⑤ 訪問教育の充実 ⑥ 合理的配慮の提供を見据えた教育実践 ⑦ インクルーシブ教育システム構築を推進するためのセンター的機能の充実

※ 評価基準 4点(よくできている) 3点(できている) 2点(あまりできていない) 1点(できていない) 0点(わからない)

※ 達成状況 A判定(3.6未満～3.2以上)よく達成できた B判定(3.2未満～2.8以上)達成できた C判定(2.8未満～2.4以上)工夫・改善が必要である D判定(2.4未満)改善が必要である

領域	学校経営の重点	NO	分掌等	評価項目(本年度の実践目標)	自己評価(数値)	自己評価(達成状況)	保護者アンケート	総括(成果及び課題と改善策)	学校関係者評価
I 学校運営	①	1	総務	家庭や地域、関係機関への情報発信と教育活動への理解啓発を図るため、ホームページを2週間に1回は更新する。	3.0	B	A	2週間に1回の更新は行えなかったが、更新回数は増加した。新たに地域支援センターの項目を開設した。近隣の学校に対してセンター的機能の活用として巡回相談・教育相談・情報提供など情報発信できた。本校の教育活動についても情報発信して保護者の理解を得られた。	学校自己評価及び総括は適切である。  ・項目9に関して、非常時での自己評価が低いのが気になる。避難支援時の誘導や人員数は十分であるか検証する必要がある。
		2		創立10周年記念式典に向けて、各部・PTAと連絡調整を円滑に行う。	3.2	A	PTAとのミーティングにおいて、創立10周年記念式典に向けての内容を説明し、連絡調整を行うことができた。		
		3	教務	出席簿と欠席状況報告書の提出を指定期日までに完了する。	3.3	A	A	指定期日を設定しアナウンスすることで、期日内にほぼ提出完了することができた。しかし、まだまだ提出が遅れる学部・学年があるので、引き続き周知徹底していきたい。	
		4	生徒指導	スクールバス乗車変更届の提出忘れ・記入間違いを1日3件以内に減らす。	3.0	B	スクールバス乗車変更届の書式を変更し、新たにスクールバス乗車変更届・欠席届としたことにより、欠席者の出し忘れや記入漏れが減少し、実践目標は概ね達成できた。しかし、依然としてスクールバス発車直前に数名の児童生徒の乗車確認が行われることがあり、引き続き教員の意識を高めていく必要がある。		
		5		職員室高等部掲示板に部活動通信等を掲示することで各部の部活動実施日を周知する。	3.1	B	サッカー部・スポーツクラブ芦屋・文化芸術部の各顧問の協力により、掲示だけでなく、月行事予定表やグループウェアにも実施日を明記することで、概ね実践目標は達成できた。		
		6	保健	食物アレルギー等、給食で個別対応が必要な児童生徒に対して、間違いなく配膳を行う。	3.1	B	A	担任がアレルギー対応児童生徒の個別食を受け取る時、献立・名前・除去食の内容が書かれたプリントを確認し必ずチェックをしてから持ち出すことにした。それを全担任で共有する。	
		7	情報図書	校内LANの新システムへの移行を円滑に行う。	2.8	B	新システム移行まであまり時間がなく、PCの不具合等もあり手間取ったが、移行開始日までに間に合わせる事ができた。今後も新規PCの設定などをスムーズに行いたい。		
		8	管理	月一度の安全点検を指定期日までに完了する。	3.2	A	A	安全点検を指定期日までに完了することで定期的に破損箇所気づき修理することができた。	
		9		車いす利用の児童生徒の避難・誘導を迅速に行う手立てを考える。	2.8	B	A	避難訓練では教員2名でペアを組んで役割分担を明確にし、動線を確保することによってスムーズに避難ができつつある。次年度当初に児童生徒の実態を把握して、支援の必要な学部・学年・人数を掌握しておく必要がある。	

	⑦	10	地域支援センター	来校教育相談、巡回相談、研修会講師、高校通級指導実践研究事業サポート等のセンター的機能を発揮し、通信やHP等でそれらの内容の情報公開をすすめる。	3.1	B	B	中学校、高等学校、私立学校、福祉事業所や保護者からの相談があり、依頼が多分野に広がった。今後は各学校園のコーディネーターの育成や校内組織の整備支援が求められる。学校HPに「地域支援センター」を追加し、センター的機能についての情報が本校教員を含め広く活用できるツールとなった。「地支セン通信」を2学期から週1回発行し、HPに掲載した。今後もより一層利用しやすいポータルサイト化を目指す。	
II 訪問教育	⑤	11	在宅訪問	個々のニーズに合わせた教育活動を推進するため、新転入児童の実態把握を確実に行う。	3.4	A		保護者、前在籍校、主治医等に聞き取りを行い、訓練見学も行って実態把握に生かした。三者三様、多様化している一人一人のニーズに合わせて、今後も教育活動を展開していきたい。	学校自己評価及び総括は適切である。
		12	砂子訪問	施設等の関係者や保護者と情報共有を図り、それぞれの児童生徒の実態に合わせた教育活動を推進する。	3.4	A		授業日毎に連絡用紙を通じてその日の様子を伝え合い、頻回に施設の生活支援担当・看護師と話し合って児童生徒の情報を共有し、効果的な学習活動につなげられた。その成果の1つとして、学校と施設が協力し、本校へのスクーリングを行うことができた。今後も連携を密にし、より豊かな情報共有を図り、児童生徒を共に支える雰囲気醸成して更に充実した教育活動を行いたい。	
III 教育課程	②	13	教務	個別の指導計画の目標設定の際に、教科学習に関する項目を1つは取り上げる。	3.0	B	A	実態を記入する際に、教科学習面を意識して記入しているものが多かった。今後は、児童生徒の実態における課題面と改訂された学習指導要領の教科の目標内容との整合性に着目して記入することができるよう取り組みたい。	学校自己評価及び総括は適切である。
		14	支援部	子どもたちに力をつけるため、子どもの実態を正しく把握する研修を行い、検査を含めた実態把握期間を設け、目標設定につなげる。	3.0	B	A	年度初めに3回、対象学部を分けてアセスメント研修を実施できた。実態把握期間を4月と1・2月の2回設けることによって、実態の把握がより正しくできた。アセスメントツールとしての「人物マップ」を提供できたが、実施率と活用については今後の課題である。検査結果をどう目標設定、授業内容に反映させていくかを検討し、提供していきたい。	
		15	研究研修	研究にあたって全体での説明会を実施し、研究内容等の共通理解を図ったうえで研究をすすめる。	2.8	B		児童生徒が「わかって動ける授業作り」をめざして、来年度も引き続き、各学部の状況に合わせ、共通理解を図ったうえで研究をすすめていく。また、研究した内容を児童生徒への支援の充実及び児童生徒の自立に繋げていきたい。	
		16		教育課程研修会、地域公開講座等を企画し、特別支援教育に関する研修の充実及び専門性の向上をめざす。	3.0	B		外部講師を招聘し、新しい情報や専門的な内容を知り得る機会となった。今後も特別支援教育に関する研修会を企画し、教師の指導力や専門性の向上を図れるようにする。	
		17	保健	適切で効果的な保健学習を指導するため、教材・教具の充実を図る。	2.8	B		年度当初に保健学習で利用できそうな教材教具を保健部全員でチェックし補修を行った。各学部・学年に一年間の保健学習の指導計画を立て、年間を通じてその季節や生徒の実態に合わせて授業をするように伝えた。	
		18	小学部	日常生活に必要なスキルの獲得を目指した指導を行うため、視覚支援を取り入れる。	3.3	A		児童が意志や要求を教師に伝えることができるよう、場所や活動などの写真、イラストカードを用意しておく、自分で選び、伝えることができる児童が増えてきた。今後は、選びたいカードがない場合があるので、カードの種類を増やしたり、選びやすく整理・提示したりするなどの工夫をしていく。	

	② ③ ⑥	19	中学部	一人一人の実態を踏まえた学習活動を計画的に実践できるよう、クラス会議、学年会、学部会で共通理解を図る。	3.3	A	A	必要に応じて会議を開き、関係者の共通理解を図ることに努めた。生徒の学習活動を中心に日々の生活での諸課題等、気になる点は打ち合わせなども含めてできるだけ早い対応に努めたが、理解不足から起こるちょっとした行き違いや不注意で安全面に不安を感じることもあった。引き続き改善が必要である。	
	②	20	高等部	協働して教育に取り組むため、夏季研修会等を通してチーム力を高める。	3.0	B		夏期研修会では、仲間探しゲームで仲間分けをしながらコミュニケーションをとり、また運動型ゲームでチーム力を発揮することができた。学部会では、いろいろなテーマで話し合うことができたと思うが、テーマについては多くの教員のニーズに応える必要がある。	
IV 課題教育	③	21	進路指導	関係機関と連携を図り、進路先の情報について、本人・保護者に最新の情報を提示する。	3.1	B	B	進路先・実習先については、関係機関や就労コーディネーターと連携し、企業・事業所の受け入れ先を増やした。個々に応じた進路先の提示・アドバイス等がより求められており、事業所・企業における採用等の状況は刻一刻と変化を続けている。常に密接な連携を図り、本人・保護者に最新の情報を提示できるようにしておく必要がある。また、個人プロフィールの書式に発作、服薬、アレルギーの欄を追加改善した。	学校評価及び総括について、改善を要する項目あり。  ・保護者アンケートの結果ではほとんどの項目がA評価であるにもかかわらず、進路指導については毎年厳しい評価となっており、保護者がまだまだ満足できていないことを表している。いろいろな選択肢の中から本人・保護者が本人に合った進路先を選択できるよう説明・見学・実習の機会をできるだけ増やしてほしい。
		22		進路懇談に際して、進路に関する情報を精選し、より分かりやすく伝える。	2.9	B	B	学部・学年ごとに説明会を実施し、通信の発行等を通して情報提供を行った。PTAと共催の講演会では「成年後見人制度と相続」をテーマに実施し、反響を得た。進路懇談では学年・クラス担任と情報共有を図り、本人や保護者の希望・意向を尊重しつつ進めた。進路に関する情報は膨大であり、ニーズに応じてよりわかりやすく伝えていく必要がある。	
		23	キャリア教育推進委員会	キャリア教育全体計画表で取り上げている項目を、個別の指導計画の目標の中に1つ以上取り入れる。	2.7	C	A	全体的にはキャリア教育全体計画表を意識した取組を実施することができた。さらに、周知・理解かつ個別の指導計画に活用できるように、当委員会では主旨説明を行ったり、教科領域担当者会において理解促進を図ったりしていく。	
	④	24	交流及び共同学習推進委員会(小・中)	児童生徒の経験・活動の場を広げて社会性を育むため、交流のねらいを明らかにして取り組む。	3.0	B	A	学校間交流は、近隣小、中等教育学校と継続して交流できたが、潮見中学校とは文化祭交流のみとなった。より子ども同士の関わりができるよう内容を考えていくことが課題である。居住地交流は希望者に実施した。引率の態勢を整えること、交流のねらい、打合せを相手校としっかり行うことが必要である。	
		25	交流及び共同学習推進委員会(高)	兵庫県立西宮高等学校との共同学習では、昨年度の反省に基づいて「共同学習」をさらに深めるために、本校の授業(高等部1年生職業クリーン班)を1時間開講する。	3.2	A	A	11月の共同学習で実施し、県西生20名と芦特生16名で共同学習を行った。授業後の県西生の感想には「優しく芦特の人達が教えてくれたので初めてのなのによくできた」などあり、本校生が主体的に県西生に教える場面のあった共同学習を行うことができた。	